

郷土室だより

第126号

平成18年10月1日

編集・発行

中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地1-1-1

電話 3543-9025

刊行物登録番号 18-031

「変りゆく都市像」(5)

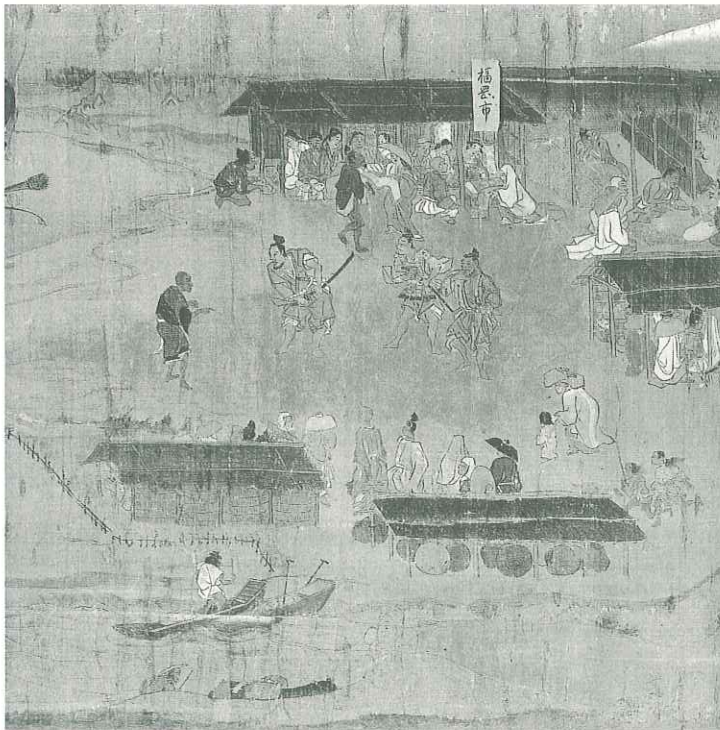
◇福岡市ふくおかのいち

前号ではその扉に「一遍上人絵傳」に描かれた代表的な「いちば」である「福岡市」の風景のほんの一部を紹介した。また最後の項で「最も主要な都市施設」として「下水・小溝・舟はし・曳舟と曳き子」などを挙げて、それらは最重要な都市施設だと繰り返し述べたのだが、ここではさらにそれぞれの説明を詳しくすることにしよう。

なお話を進める都合で前号の表紙に掲載した写真を中心にしたが、京橋図書館所蔵の「一遍上人絵傳」(日本絵巻大成 別巻・中央公論社刊)およびこの「大成」に収められた多くのカラーで復刻された絵巻物群をご覧になることをお勧めする。

この「福岡市」は、一遍研究の成果を集約すると備前国吉井川河口(岡山県岡山市東部)にあつて、その地はむかしは製鉄技術の中心地であつたという。一遍はここで一度に三百人の得度者を得たといわれ、鎌倉・室町期を通じて中国筋における時宗の一つの根拠地になつたと伝えられる。

また「河口」から吉井川を遡るとJR赤穂あこう



「一遍上人絵傳」(福岡市の部分) 『日本絵巻大成 別巻』(中央公論社刊) より

線の長船駅に面して福岡という地名がある（現在の瀬戸内町）。かつては備前長船と言えは銘刀の代名詞になっていたように、昔から製鉄・鍛造、日本刀生産地の一中心地として知られた地域である。

ここで一遍は弘安二（一二七八）年ころ、つまり弘安四年に二度目の蒙古襲来があつたのだが、その寸前とも言える時期に、この「福岡市」を通つたのである。

絵巻物での「福岡市」の全体は屏写真の幅の二倍ほどの範囲が描かれている。だから屏写真の範囲は「福岡市」の約二分の一ほどの部分である。そしてこの「いち」を構成する棚Ⅱ店は写真での正面にある約三間半×一間の店と、その右に約二間の奥行をもつ俵物Ⅱ穀類を売る店が、間口の一部（二間ばかり）を描かれて並んでいる部分に過ぎない。

そうした範囲の少なさに加え、市の店の寸法を約何間といった寸法を述べたのは、その店に座る人物の人数からの推定であることも断つておこう。

◇「いち」のありさま

左端の店は現在で言う「足駄」を売る店である。現在では足駄は殆ど姿を消した履物だが、江戸時代中期ころから一般化した木製の履物だった。

足駄について一応の説明をする。と、木製の台木に二〜三枚の歯をつけたものに、鼻緒をつけた一対の履物をいう。台木は長さ七寸五分から八寸、幅は男性用で四寸、女性用が二寸六分ほどが一応の標準（一寸は約三・三センチ）。

材質は桐・樫・檜などの一つの台木に歯を削りぬき、三つの鼻緒用の穴をあけたのが下駄である。このように一つの木で作った履物を下駄、或いは駒下駄と呼んだ。台木に木材などで作った板を差し歯にしたのが足駄である。江戸時代になると歯の高さを高くして雨天用の履物となった。

足駄と下駄は男物・女物・子供用などに大別され、その歯は二本である。それまでの藁草履や草鞋に替わって庶民の生活必需品になった。

ここまでは江戸中期以後の話だが、『一遍上人絵傳』が成立した当時の下駄とは水田耕作用の田下

駄、海苔採取用の海苔下駄、酒造用の齧下駄など、足場の悪いドロドロの場所での作業用の道具として利用されていた。

もう一つの用途は、地面に大便をする場合の履物というより道具としての足駄があつた。その状況は中世の各種の地獄絵巻・餓鬼絵巻など散見されるように、人間の大便は犬をはじめとする小動物の餌として、狙われている有様が良く描かれている。

中央アジアの遊牧地帯では家畜の糞は貴重な燃料として余すことなく利用されているが、湿潤のモンスーン地帯の日本列島では、生のまま野生小動物の餌になつたのである。また人間側の都合と

しては、決まった厠Ⅱ川屋Ⅱ便所のない場所では、便意を覚えるたびに地上に穴を掘って処理する手数と道具の必要性があつたわけで、へはだしでへしゃがんで地表に糞をする時、その盛り上がり

が尻に支えるのを防ぐ道具だ。「福岡市」の入り口に足駄を売る棚が在るのは「いちば」に集う人々のへ便意を考えると、これまでに述べてきた「いちば」の一面が

◇二軒の布屋と穀屋？

足駄屋の右側の店は店の前で一反の白い布を取り合う形に描かれた男女の姿から推定して、白い布……まだ木綿は普及していなかった時代だから絹だと思われる……白布は夏だつたら生絹、冬だつたら練り絹が一般的だった。

この男女は夫婦で「いちば」にやつてきたが、妻が白い布をどうしても買いたいというのに、夫は何やかやと買ひ渋つて「いちば」の「みち」の真ん中で言い争っている姿だと解釈されている。

その右隣の店も布屋だが、この店では柄物・色物、つまり染めた布を売る店である。客は頭を丸めた男と、おそらくはこれも頭を丸めた女性で、被衣（シヨール）の布と着物が一体になつたような上着を着ている。

その隣の店の前、つまり「いちば」の通りにもほぼ同じ姿をした女性と、白衣に笠を被つて座っている二人の女性が見える。

右端の店には俵物を置いた上

で男が寝そべっている。この場合の俵物とは米や雑穀を俵に詰めた物のようである。重くてかさばるから俵ごと盗まれることはないという安堵感からか、口髭と顎鬚を生やした壮年のオヤジらしい人物が、大口の取引が済んで相手が荷物を引き取りにくるのを待っているところなのかもしれない。

◇仮面屋

その下に道路を挟んで見える店では面を売っている。能面や伎樂の面ではなくこれも現在の社寺の縁日などで必ず見かけられる、いわば子供向けの桃太郎・金太郎、月光仮面・仮面ライダーの面などと同じような面が、壁に並べてかけられている。もちろんその材質は木の葉や竹皮、ヘギや紙で作られたものであったろう。

この『一遍上人絵傳』は、例えば民俗学者の宮本常一によれば「一遍没後十年目」（生没年は延応元年Ⅱ一三三九、正応二年Ⅱ一三八九）の成立だというから約八百年前から「いちば」には仮面が売られていたことがわかる。

「いちば」と仮面の関係は一見縁がないようだが、「いちば」に集う人々全部が、それぞれの心情の中で、民俗学でいう「ハレ」と「ケ」の仮面を被り分けて「いちば」の一員になっていたと考えると興味がないものがある。またその仮面が外れた姿が先の「白い布」を挟んでいがみ合っているように見える男女なのかもしれない。

◇「いちば」の構造

ここからは再三繰り返して述べた基本的な「都市施設」について、図には見られない事情を述べることにする。図の左端の上から下に蛇行をした細い水流が見られる。このような画法はこの絵巻の特徴であって、多くの場合、川ではなくて人工的な小溝の場合が多い。

図のように掘って立て小屋の長屋で、床もない棚だけの店舗でも、同じような長屋が寄り集まって、そこに人が敷物を敷いて座って商品を並べ商売をしていたのだ。店の商品のうえで心地よさそうに寝をする男が見えるという

ことは、いちおう雨露をしのげる屋根の下では、簡単な飲食が出来たことをも想像出来る。

飲食が出来る場所があれば当然の結果として、下水・排泄物処理の方法が問題になってくる。砂漠の周辺にあるオアシスを中心にして立地した都市では、下水・排泄物処理は命の綱である泉の水質を保つ位置に設けることは当然のことであり、そうした事情はこの多湿な日本列島の場合も同じであった。

「いちば」の場所が海拔高度が高い地点だと、使用済みの「下水」は地表をそのまま流れても、地下に浸透した場合でも、その水量にもよるがある距離を流れば、自然に浄化されてやがては流域の河川に合流して海に至るのが普通の状況である。

ところが日本人の社会は、はじめて意識的に臨海低地を選んで権力の所在地としての都市を建設したために、深刻な宅地不足を招き、その解決策として手近かな海を埋め立てて、十七世紀初頭には人口百万の大都市江戸を造り上げたと言ふ実例を持っている。

埋立地に井戸を掘っても飲用水は得られない。江戸の場合は武蔵野台地内の小規模な谷川を利用して当面必要とする程度の規模の水道を造ってはいるものの桁違いの人口増加にはとても追いつくことの出来ない規模のものであった。

このように江戸という都市は水不足を前提にして建設した都市であった。都市建設の責任者は「水がなければ、ほかから運べば良い」という発想で、大小の水道施設を造っている。

そして、「外から運んだ水」を使用した瞬間から「下水」になるという、液体または流体の処理も心得ていたようである。それが前号からくり返し強調する「下水処理」のシステムで、すべての都市施設に先行し設備された、いわば中心的な都市施設だったのである（江戸の上下水道のことは項を改めて、より具体的に取上げる予定）。

◇「いちば」の人々

再び図に戻ると、図の左端の僧が一遍で、武士達が刀の柄に手をかけて、一遍の「いちば」入りを制止している。これが一二三号の(2)「変り行く都市像」中の「市・いちば・市場」の項で取上げたような、権力者の「いちば」支配によって自然発生的な「いちば」が「市場」化している有様が描かれているのである。

そしてその争いの場である道路を隔てて、前項の仮面屋の一端が描かれている。この描き方が重要であって、「いちば」はおのずから形成された「みち」の両側に「みせ」が並ぶ形に成立している。こ

のことは「福岡市」に限らずすべての「いちば」に共通なことであり、中世から近世への過渡期に成立した都市（京都・江戸・大坂）などの場合にも受け継がれた。

というより、世界中の都市をみても、そのもつとも都市らしい場所、つまり王城や寺院・教会・神殿、またはオアシスなどを取り巻く（道路沿い）には、必ず「いちば」が成立した部分がある。このことはいわば世界的に共通してみられる事柄なのである。

また（道路沿い）とは人の通り道に沿ってということであるから、馬車や荷車の替わりに船が往來する水路沿い（河岸）にそつて「みなと」|| 湊（みなと）という名の「いちば」も成立している。

繰り返すが「いちば」・「みなと」|| 町・湊は「みち」を中心に成立し、その道の交差点ごとに町は有機体としての細胞が分裂・増殖するように広がって行き、「都会」を形作つたのである。

このような「みち」を歩く人間の姿にも特徴が見られる。この絵（写真）中の人物の大半が（はだし）であつて、履物を履いているのは、

「白い布」を取り合う男女と、柄物・色物の布を売る店先の男女の客だけであつて、他はみんな（はだし）である。

つまり常時（はだし）の人びとは、その「いちば」にいる人々であり、「いちば」に来る客は履物を履いてくる人達という二つの場合があることも、それぞれの「いちば」の地理的・歴史的條件を反映したものであつた。

◇被り物

またこの限られた小部分図であっても、大きな特徴を見出すことの出来る事柄として、人々の被り物の有無がある。被り物（笠|| おおむね男が用いている。女は被衣の上にさらに笠を被っている場合もある）。

被り物を用いないのは一遍のような僧侶と、頭を丸めた僧形の男女に限られる。とくにこの図の場合の女性は尼僧かそれに準ずる者であると想像できる。

普通の男性は武士・商人・職人ともに共通して烏帽子を被っているのが、大きな特徴である（烏帽

子|| 成人男子の被り物、多種類が知られているが、この図のような場所と場合には、漆をかけた紙を折つたものを髻につける最も簡単な形式のもの）。

このような風俗を江戸中期以後に日本人の作成した絵巻である『現代勝覧』（ベルリン国立東洋美術館蔵・最近一般に公開された）の、通町筋の日本橋から今川橋間（現在の中央区日本橋北側地区）の西側を描いた絵巻物と比較すると、その多数の通行人が階級を問わず、物の見事に全員が月代を丸々と剃り上げている状況であつたことを思い出させる。

この場合の月代は武士の場合には義務として自分で剃つた。都市生活の町人（成人男子）は町内抱えの髪結いに、人員点呼の意味を含めて月代を剃ってもらつた結果の風景であつた。

十三世紀の『一遍上人絵伝』と十八世紀の『現代勝覧』と約五〇〇年の時代差があつても、この種の市場や市街地を通行する人々を描いた風俗画は、それぞれの時代の特徴を鋭く反映させている。

（次号に続く。鈴木理生）